調査研究活動報告

宮古島諸島地域における外囲を有する石組墓（ミャーカ）の調査

A Survey of Stone Tombs with the Outer Enclosures (Myaaka) in the Miyakojima Islands Region

KUGAI Mitsugu and KURIKI Takashi

久貝弥嗣・栗木 崇

第１章　調査・研究の目的と経緯

第１節　調査に至る経緯と調査の目的

国立歴史民俗博物館では 2015 年度から 2017 年度にかけて「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」と題する基幹研究を実施した。

この研究では，14 ～ 16 世紀の琉球王国の大交易時代の繁栄を中心としながら，一方で宮古・八重山諸島などへの侵攻という帝国的側面に注目し，中世後半の東アジア海域における多様な動態を捉え直すことを目的としていた。多元的フィールド解析研究として歴史学，考古学，民俗学，その他の関連諸科学の立場の研究者が共同研究として現地調査を重視して行った。

平成 27（2015）年 10 月 24 日～ 26 日に宮古島市にて行われた共同研究では，研究報告会と巡見を行い，その中で宮古島と周辺諸島で確認される「ミャーカ」と呼ばれる石組墓に注目した。

「ミャーカ」という呼称はこの地域独特であり，また大形の切石を石材として使用し，その年代が古いものでは 14 世紀代とも指摘されている。これが事実ならば研究の対象となる時期であり，しかも沖縄島では浦添グスク，首里城に切石を石材とする石積（石垣）が確認できるが，これほど大形の切石は使用されていない。

「ミャーカ」ついては，巨石墓として古くから研究者たちの注目引いてきたが，主に民族学的立場から研究されていたこともあってか，研究の基礎資料となるべき石組墓の石材の形状や加工の状態など詳細な記録を残すための調査は十分行われてこなかったといえる。

今回の調査では，それらの事を踏まえて，まず，この地域の「ミャーカ」と呼ばれる石組墓で現在確認できるものを把握し，技術的な側面に着目するためにいくつかの「ミャーカ」について測量，写真撮影を行うなどの調査を実施した。

以下その成果について，調査方法，経過を述べ，先行研究をまとめた上で測量図，写真を掲載するとともに若干の所見を述べていくことにする。

第２節　調査の方法

2017年4月22日　国立歴史民俗博物館で調査方法についての打合せを行い，宮古島市内における「ミャーカ」の所在確認及び写真撮影と切石で構築されて残存状態が良好なものを測量して図化することにした。

現地調査は宮古島市教育委員会の協力を得て2017年5月12日（金）～15日（月）と2018年2月16日（金）～19日（月）の2回行っている。国立歴史民俗博物館の村木二郎のほかに久貝弥嗣・佐々木健策・小出麻友美・栗木崇が参加した。

第1回目の現地調査は5月12日（金）の午後に現地到着し，現況写真撮影，図面作成の打ち合わせを行った。13日（土）には松原ミャーカの測量図面作成を開始した。翌14日（日）からは久貝ぶさぎの図面作成を開始し，15日（月）に両石組墓の測量，写真撮影を完了した。

第2回目の現地調査は2月16日（金）の午後から川満大殿古墳，スムリャミャーカ，スサビミャーカを視察し，今回測量図作成対象をスサビミャーカとすることに決定し，17日（土）から18日（日）にかけて測量図面作成，写真撮影を行った。19日（月）にはスサビミャーカと前回測量した久貝ぶさぎ・松原ミャーカを確認し，ミャーツ墓，川満大殿古墳，スムリャミャーカの写真撮影を行った。また，宮古島市教育委員会文化財調査室にて，図面の確認，今後の報告書作成の打合せを行い現地調査を終了した。（栗木）

第2章　久貝ぶさぎ・松原ミャーカ・スサビミャーカの調査

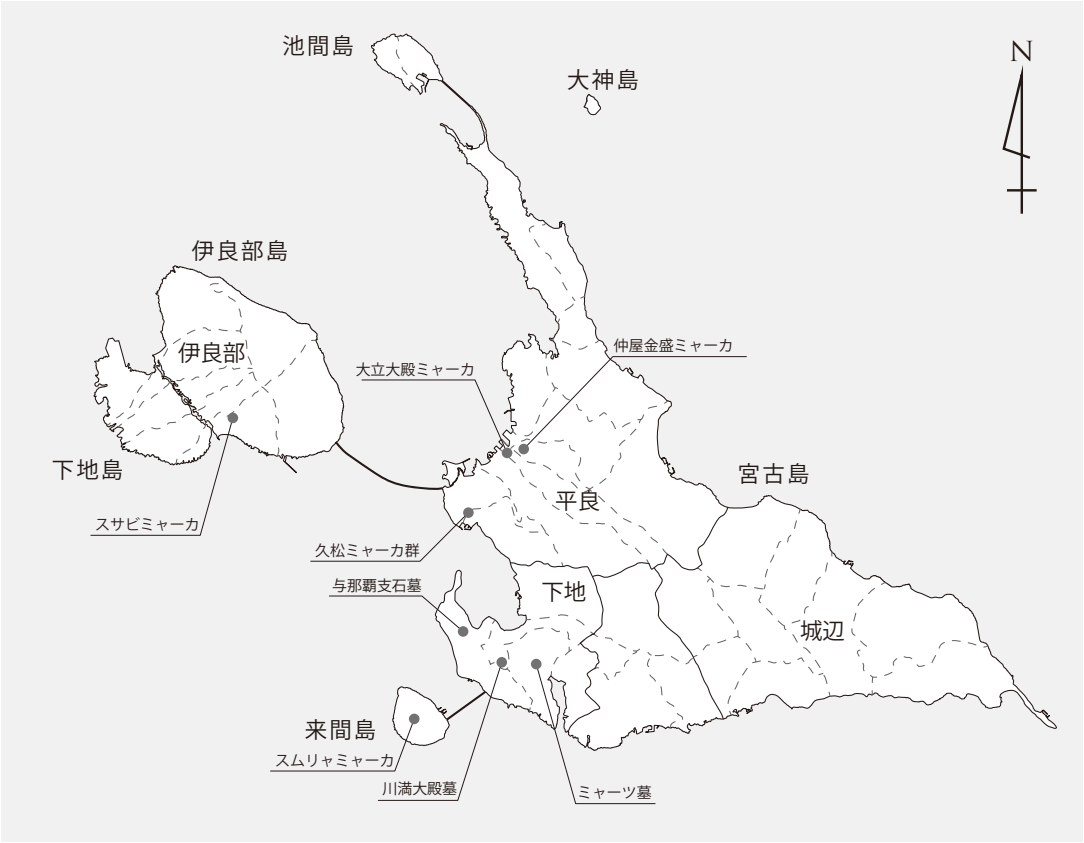
第１節　既往の調査と研究

現在，宮古島市内でミャーカと称される墓は，4基のミャーカからなる久松ミャーカ群（字久貝・松原），スムリャミャーカ（字来間），大立大殿のミャーカ（字下里），仲屋金盛のミャーカ（字東仲宗根），スサビミャーカ（字伊良部）の5遺跡が確認されている（第1図）。また詳細は不明であるが，字伊良部においてはナーザクミャーカと呼ばれるミャーカの存在が報告されており[(1)]，川満大殿の古墓（字洲鎌），ミャーツ墓（字嘉手苅）もミャーカの要素がみられる墓の一つであり，与那覇支石墓もミャーカとして扱われる場合もある。

ミャーカの定義を明確に示したものはないが，共通する構造として，方形状に石で区画された内部に，1基もしくは複数の石棺を有する墓をミャーカとして捉えることができる。また，ミャーカの語意については，石で囲われた囲いの中を「みゃー」と称することに由来すると考えられている[(2)]［稲村 1962］。

現在確認されている各地のミャーカについては，宮古島旧記[(3)]にその記述を確認することができない。また，『宮古史傳』の著者で郷土史家の慶世村恒任もミャーカについてはふれていない。ミャーカに初めて注目したのは，慶世村と並ぶ郷土史家の稲村賢敷である。稲村賢敷は，ミャーカについて，宮古に沖縄式の墓地が造られるようになるまでの宮古在来の風葬墓地遺跡であるとし，宮古島市内のミャーカについてその構造や伝承などについてまとめを行っている。そして，これらのミャーカを規模と石工技術の優劣によって上級，中級，下級ミャーカの3つに分類を行っている。以下に稲村が分類したミャーカを記す。

上級みゃーか：スサビミャーカ，久貝ぶさぎ，川満大殿の古墓，スムリャミャーカ，



第1図　宮古島市内のミャーカ分布図

あーすみゃーか[(4)]

中級みゃーか：あぱなきみゃーか[(4)]，南にゃーつみゃーか

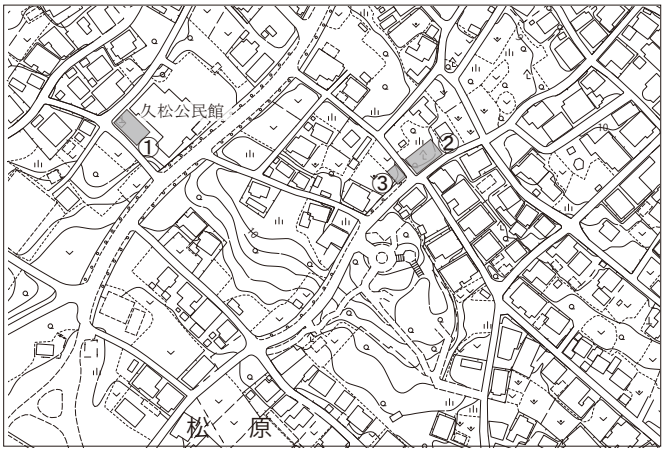
下級みゃーか：字伊良部，来間，水納島などに残されている小規模なみゃーか

前述したように稲村は，ミャーカが宮古独自の墓の形式であり，その年代や起源が15～16世紀の宮古の文化様相を示す特徴的な史跡であると考え，1957年の段階で「南にゃーつみゃーか」の発掘調査を行っている。そしてさらに，1958年には松原のミャーカ2基について発掘調査を行っている。1965年には，金子エリカによって，久貝ぶさぎ，松原ミャーカについて発掘調査および復元作業が実施されている。

しかし，その後ミャーカに関する具体的な調査・研究が行われておらず，これらの調査事例をもとにした宮古島の墓の中でのミャーカの位置づけについて論じられている。近年では，徳嶺里江によって宮古島の墓の形態について分類が行われている［徳嶺2006］。徳嶺は，沖縄県内における墓の分類を参考にしながら，墓の立地，施設の有無，形態などの属性を組み合わせ，各墓の築造年代とその推移および，宮古諸島と八重山諸島との比較を行っている。この分類の中で，宮古島市内のミャーカは，Ⅱ類の石棺墓＋外囲施設に分類され，八重山諸島では見られない墓の形態であるとしている。さらに築造年代については稲村，金子説に基づき，近世以降には引き継がれない墓の形態であると位置づけながらも，ミャーカの年代については再検討の必要性があるとしている。また，

島袋綾野は八重山諸島のミャーカに類する切石積の墓が近世～近代にかけてのものであることなどから，通説に疑義をなげかけている［島袋2006］。

第２節　石組墓（ミャーカ）の調査



第2図　久松ミャーカ群の位置と名称

①：久貝ぶさぎ（稲村）
②：松原ぶさぎ（稲村）
　　ウイサ北（金子）
③：無名のみゃーか（稲村）
　　ウイサ南（金子）

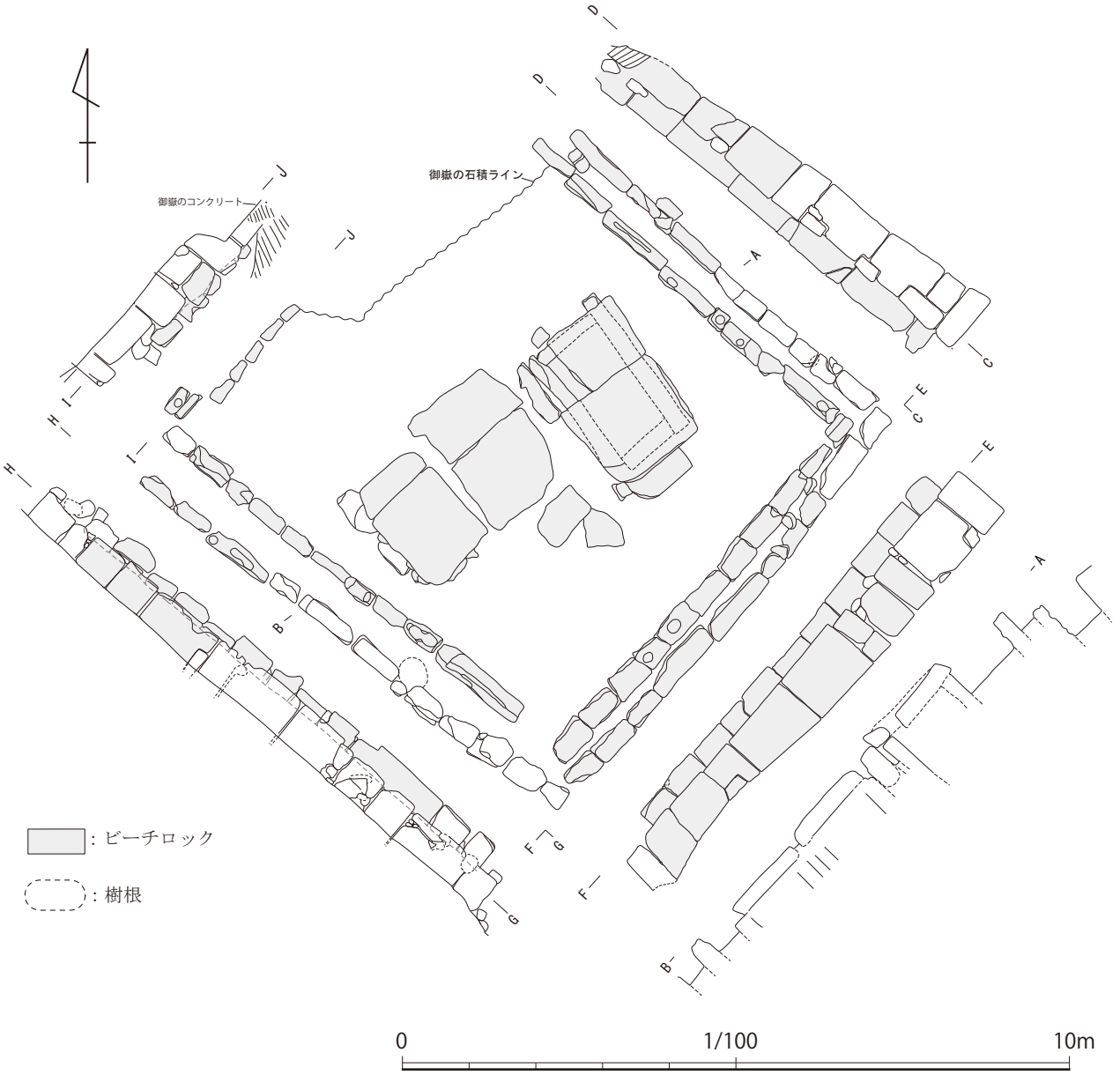
（1）久貝ぶさぎ

久松ミャーカ群は，宮古島市平良字久貝と松原で確認されていた4基のミャーカの総称である。内訳としては，字久貝のミャーカ1基と，字松原のミャーカ3基から構成されるが，現在，字松原で確認できるのは2基のみである。昭和49（1974）年8月29日に旧平良市の建造物で指定を受けている。4基のミャーカについては，これまでの調査報告［稲村1957，金子1967］によって異なる名称が使用されているが，その位置関係と名称について第2図のように整理される。

久松ミャーカ群は，前述のように稲村賢敷と金子エリカによって2度発掘調査が行われている。稲村の調査は松原ミャーカ2に比定される「松原ぶさぎ」と，松原ミャーカ1に比定される「無名のみゃーか」の2か所で11月4日～6日の3日間という短期間であった。稲村の発掘調査の功績の一つとして，松原ミャーカ1の存在を明らかにした点があげられる。その調査経過にも記されているように，松原ミャーカ1は調査当時塵捨て場になり樹木が生い茂っていたことから，松原ミャーカ1が御嶽と同じような拝所としての性格を有していなかったことが分かる。

久貝ミャーカは，現在の久松公民館に隣接している。このミャーカは，「久貝ぶさぎ」と称され，「アコーダティ親ミャーカウイサ」とも異称される。ミャーカの北西側にはイビが設けられており，里の人々が年中行事に拝んでいる。久貝ぶさぎの祭神は，アコーダテウヤで，仲宗根豊見親の妻ウツメガの父である。年中行事に拝まれているものの祭祀が伝承されているものではない。

前述したように久貝ぶさぎの北西側にはイビが設けられているため，その部分の石囲は現在確認できず，3辺のみが残されている。外側の石囲いの規格は，南東側が約7.8 m，南西側が約8.2 m，北東側が6.8 mを測る。北西側に石囲いが欠如するため，北東側の石囲いについても一部欠損している可能性があり，南東側と南西側の数値を比較するとほぼ方形の石囲いであった事が推察される。内側の石囲いについては，南東側で6.7 mを測り，南西側については，部分的に石囲が途切れる部



第3図　久貝ぶさぎ測量図（S=1/100）

写真1　久貝ぶさぎ

分があり，その部分をぬくと約6.7 mを測り，板石があったと推察する場合は約7.4 mである。

北東側は，外側部分と同様に一部石囲いが欠如している可能性があるが，現存長としては約6.3 mである。外側部分と同様にほぼ方形状のプランを構成する。この2重構造になっている石囲い部分について，金子エリカ氏は，本来は組み上げてテラス構造を呈する石囲いであったとしている。確かに部分的な溝状の凹みは認められるが，これを組み上げるという構造については疑問を呈する。現在確認される2重構造の石囲いについては，金子氏による復元作業であるという点を考慮しなければならいが，現況として外側部分の石囲いは現在の地表から約0.6～0.9 mの高さを有し，内側部分の石囲いは外側部分より約0.2～0.3 mほど高くなる。板石の厚さは約0.2～0.3 mほどで，長さについては最も長いもので約1.55 mを測り，約1.0～0.6 mの長さのものが多く使用されている。石材としては，海岸部にあるビーチロックと内陸部で採石できる琉球石灰岩の2種類が確認できる。

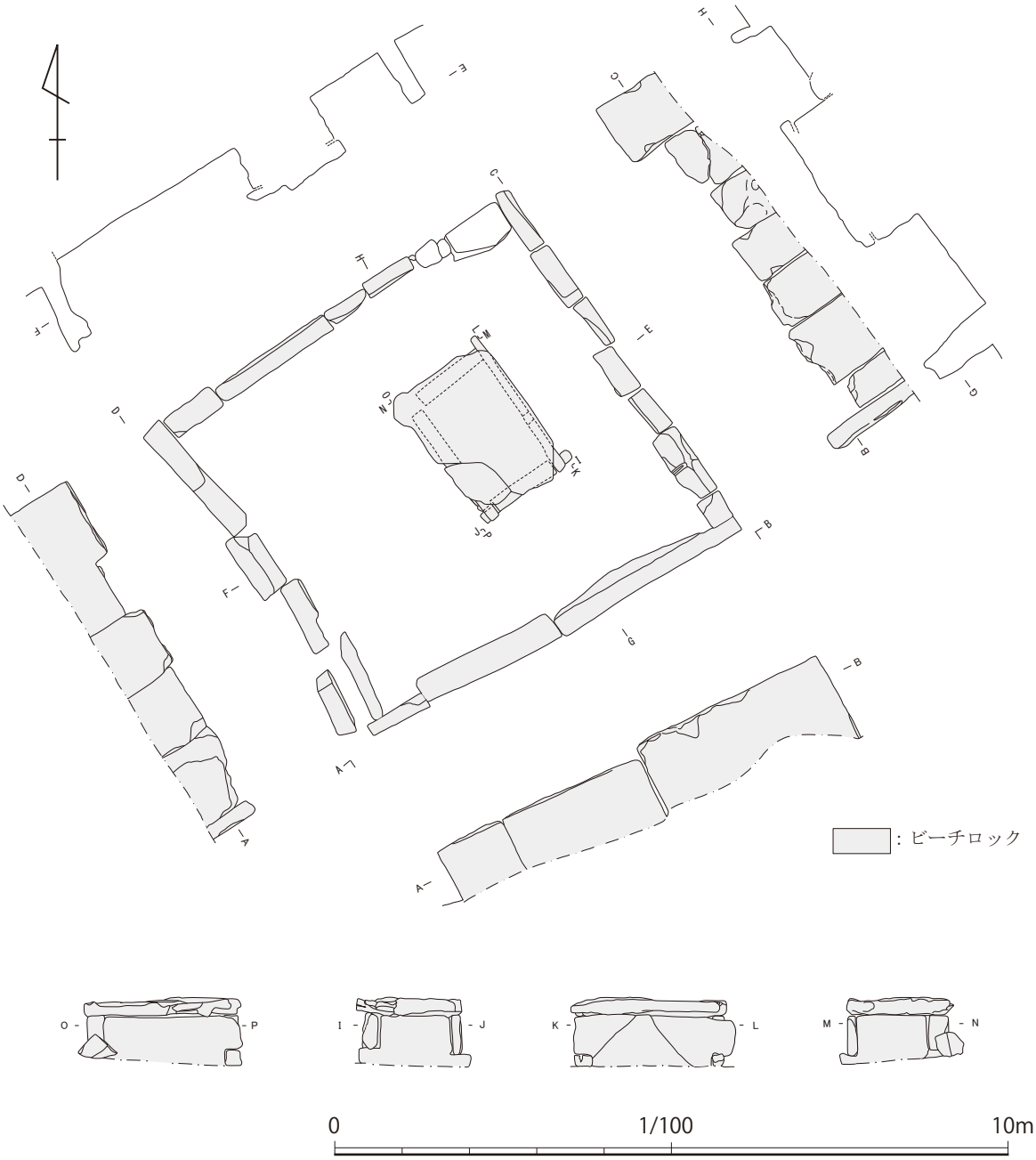
石囲いの内部には3つの石棺が確認される。3つの石棺は，金子氏も指摘するように2つのタイプに分かれる。北東側の石棺は，ビーチロックを使用し，4辺に各1枚の板石を配置し，天板の板石で覆うのに対し，中央と南西側の石棺は，0.3 m大の琉球石灰岩を並べて4辺の側面を構成し，同様に琉球石灰岩の天板の石で覆っている。北東側の石棺の蓋石は，長辺2.5 m，短辺1.5 mの略方形状を呈し，厚さは0.27 mを測る。長辺の軸は南南東－北北西を向く。蓋石は，現在大きく2つに割れており，北西側の一部は石が割れて側面におちている。石棺の南東側には，金子氏が線香などを置くとした石が一つ置かれている。中央と，南西側の石棺は，北東側の石棺に比べ一まわり小さい。中央部の石棺の蓋石は長辺2.1 m，短辺1.3 mを測り，南西側の石棺の蓋石は長辺約1.8 m，短辺1.25 mを測る。いずれも略方形で，大きく2つに割れている。前述したように，この2つの石棺の蓋石を支える側面部は，25～30 cmを平均とする琉球石灰岩を積んで構築しており，蓋石も琉球石灰岩である。

（2）松原ミャーカ（ウイサ南）

現在は，市道に面しており畑地が隣接しており，御嶽として祭祀が行われることはない。金子エリカ氏がウイサ南としたミャーカである。このミャーカに関する伝承などは確認されていない。金子氏によって一度復元作業が行われているが，板石の配置状況はオリジナルに近い状況を残していると考えられる。今回調査を行った，ミャーカの測量図とその計測値について以下に記述する。

ミャーカは，板石で方形に区画された内部に1基の石棺を配置する。方形の区画は，北東側の壁面が一部崩れているが，概ね北西側4.95 m，南西側4.90 m，南東側5.10 m，北東側4.50 mである。北東側を除く3面は4.9～5.1 mと近似値を示しており，北東側が部分的に崩れていることを勘案するならば，ほぼ方形の囲いを構成していたと考えられる。

囲いを構成する板石は，一部が土中に埋まっているものの，北西側と北東側では地表から0.8～1.0 mの高さを有し比較的高いのに対し，南西側と南東側では約0.4～0.6 mと比較的低い様相を呈している。また，北西側と北東側では長さが0.7～2.2 mと比較的規模の大きな板石を使用するのに対し，南西側，南東側ではこれらに比して比較的小さい板石を使用している点とも関係している。これらの板石で最も大きいものは，南東側の壁面に位置する長さ2.25 m，厚さ0.25～0.3 m，現在の高さ1.08 mの板石であり，近似する規模の近い石としては長さ1.7 m，幅0.34 m，高さ0.85 mの



第4図　松原ミャーカ（ウイサ南）測量図（S=1/100）

板石や，長さ 1.6 m，幅 0.25 m，高さ 0.92 m の板石，長さ 1.46 m，幅 0.19 m，高さ 0.68 m の板石がみられる。これらの板石については 2 つを除きその全てがビーチロックを石材としている。

内部には，1 基の石棺を配置し，石囲いの中心部よりも南東側による。石棺は，ほぼ長方形の形状を呈しており，4 辺に石囲いの部分と同様に板石で区画を行い，その上部に天板の石を覆いかぶせている。長軸は，南東－北西を向く。4 辺の板石の区画は，短辺が 0.77 m（北西側）と 0.79 m（南東側）で，長辺が 1.84 m（南西側）と 1.64 m（北東側）である。天板の板石もこの区画にあわせるように略方形状に加工を行い長辺 1.73 m，短辺 1.22 m で厚さは 0.15 m である。石囲いと同様にビーチロックを加工して使用している。石棺の内部には現在のところ遺物等は確認できない。

写真2　松原ミャーカ

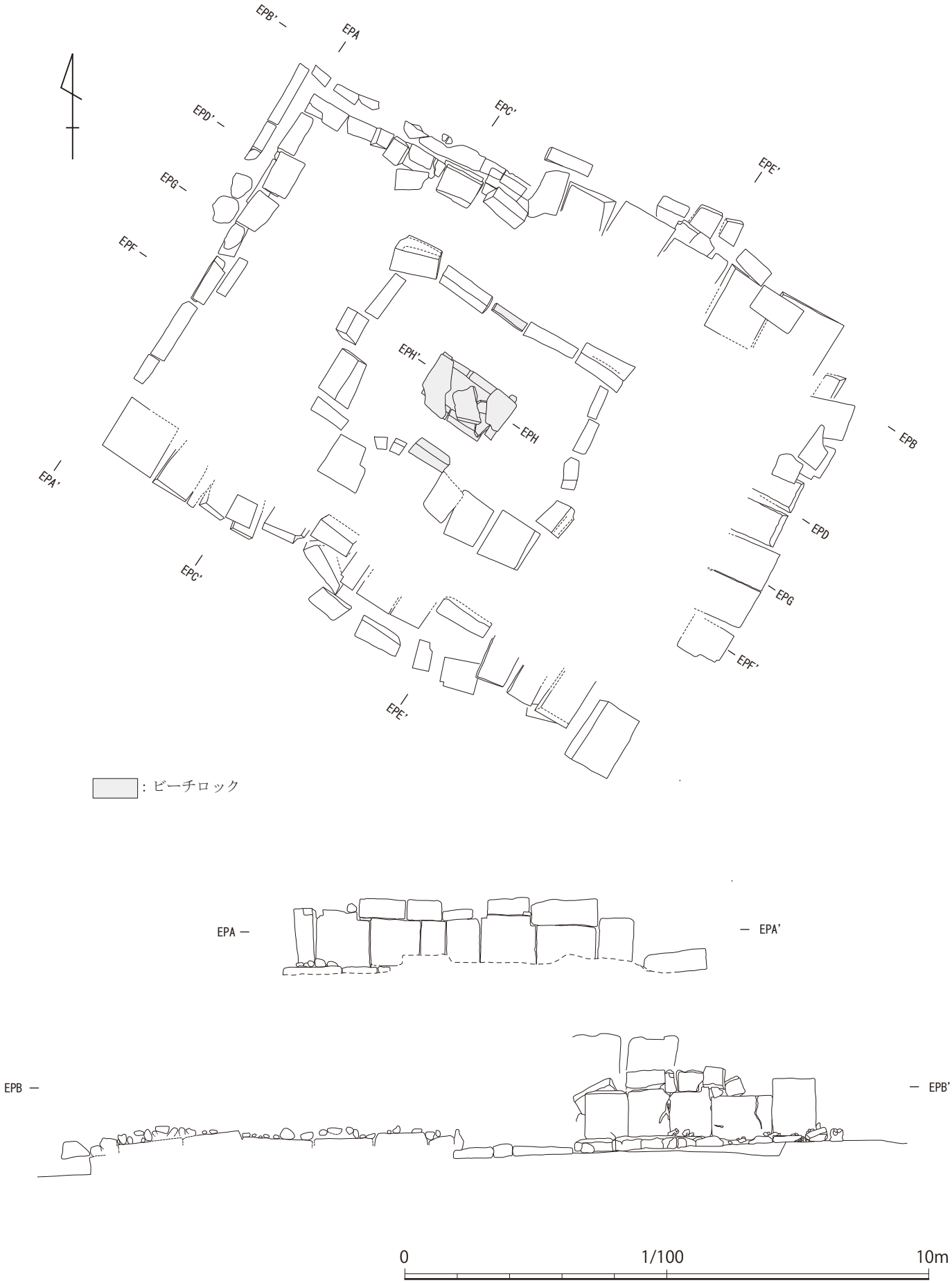
(3) スサビミャーカ

スサビミャーカは，宮古島市伊良部字伊良部1304番地に所在し，渡口の浜からは，北北東に約550 m，伊良部集落からは東に450 mの場所に位置する。1978年11月15日に宮古島市（旧伊良部町）の史跡に指定されている。スサビミャーカの周辺地は，ほ場整備工事が行われ，畑地として利用される。渡口の浜の海岸線からは緩やな斜面地をなし，標高は約10 mである。

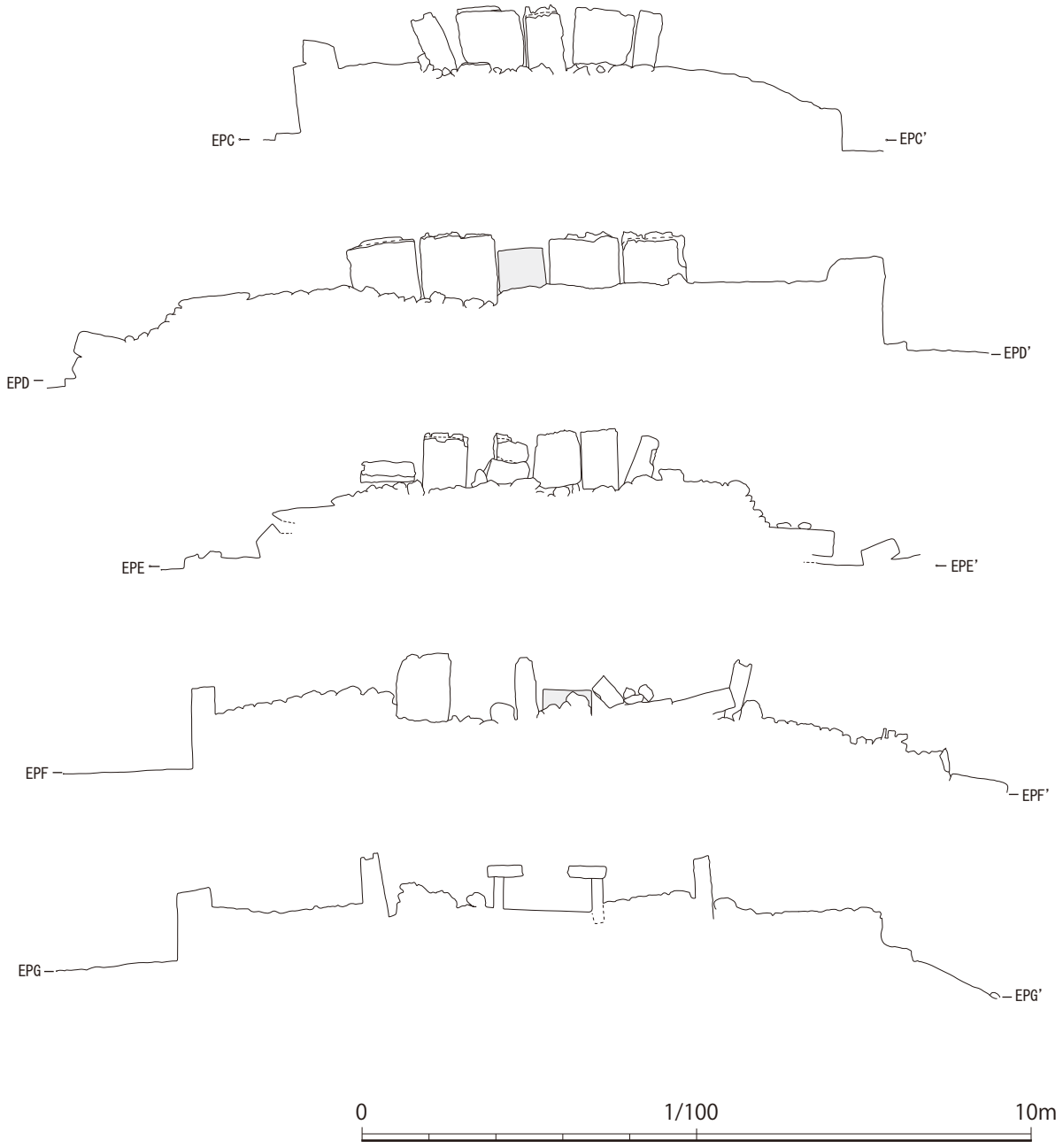
スサビミャーカの形態は，1つの石棺を二重の石積で囲っている。外側の石積みは，北側と東側の一部の石積以外はほぼ倒れた状態になっている。石積の長軸は北西－南東方向を示し，10.8 m × 7.2 mの規模と推察されている。外囲に用いられている石は，琉球石灰岩を用いており，2段に石が積まれている。一段目は，平均的に幅約0.3 ～ 0.35 m，長さ0.75 ～ 0.8 m，高さ0.85 ～ 1.0 mほどの板状の形態をなしているが，大きいものでは，長さが1.0 m以上のものもみられる。2段目は，平均的に幅約0.35 m，長さ0.75 ～ 0.8 m，高さ0.35 mほどの規格をなし，直方体状の形態を呈する。石積の一部には，隅欠を行い石を積み重ねている箇所もみられるが，その割合は非常に低い。また，外側の石積みのさらに外側に部分的（北東側）に，基段上に高さ0.2 mほどの低い石を配置している状況がみてとれる。

内側の石積は，外側に比べ残存状況はよく大部分が残された状況にある。外側の石積と同じ軸を向いて配置され，その規格は4.8 m × 3 mほどである。内側の石積も琉球石灰岩を使用するが，東と西の石積に一つずつビーチロックが対称の位置に使用されている。また，石積の上面には，長辺にそって幅約0.1 ～ 0.15 m，深さ0.04 mほどの溝を有している。このような溝は，仲宗根豊見親の上部の石囲にもみられ，木材を配置して屋根を構築した可能性も想定される。

石棺は，外側部分で1.7 m × 1.1 mほどの形態をなし，長軸は石積みと同様に北西 - 南東方向をむく。石棺部分の石は，全てサンゴ石灰岩を使用しており，床に一枚の板石をしき，それを囲うよう



第5図　スサビミャーカ測量図①（S=1/100）



第6図　スサビミャーカ測量図②（S=1/100）

に板石で周囲を囲んでおり，側面のこれらの石も一枚石を利用している。高さは80 cmほどである。現在は，石棺内部には，人骨などは確認されない。蓋石は，一部破損しているものの，本来は側面，床石と同様に一枚石を利用しているものとみられ，ビーチロックが使用されている。

外側と内側の石積みの間には，約9基ほどの古墓がつくられている。方形状に石積を行い，テーブルサンゴを蓋石に用いている。内部には人骨が残されているものも多く，周囲には沖縄産施釉陶器の灰釉碗などが散乱している。おそらく，18世紀以降に，ミャーカの空間を利用して墓を構築したものと考えられ，来間島のスムリャミャーカなどでも同様の傾向がみとめられる。伝承としては，1600年ごろに築造された墓とされているが，明確な遺物の出土状況などからの確認はまだ行われていない。

写真3　スサビミャーカ

第 3 章　その他の調査

第 1 節　その他の石組墓（ミャーカ）の調査

（1）川満大殿の古墓

川満大殿の古墓は，宮古島市下地字洲鎌 280 番地に所在する。古墓は，石棺の周辺を石で囲っていることからミャーカの一つとして認識されており，ここではミャーカの一つとして捉える（以下，古墓をミャーカとして記述する）。ミャーカの周辺地は，公園や畑地として利用されており，道路にも面していることからアクセスは容易である。1976 年に，旧下地町の史跡に指定されている。

川満大殿は，寅年の人といわれ 1458 年が生年と考えられている。仲宗根豊見親に認められ，下地の首長として下地地域を治め，ベウツ川堀割工事によって嘉手苅南部の用水を整備するとともに，オヤケアカハチの征討（1500 年）や，与那国島の鬼虎の征討（1522 年または 1506 年）に従軍したと伝えられている。

ミャーカの石囲は方形を呈し，現在の規模を測ると長辺となる南西側が 10.7 m，北東側が 10.8 m で，短辺となる北西側が 8.07 m，南東側が 8.51 m となる。道路に面した南西側は，直方体の石灰岩の切石を 3 段積み上げ，高さは 1.4 ～ 1.6 m と 4 辺の中で最も高い石積を形成する。この南西側が正面と考えられ，現在では南西側で線香があげられ拝まれている。その一方で，もう一つの長辺となる北東側の石積は 1 段のみで高さは 0.6 m と低く対照的である。周辺に積石が落ちている状況もみられない。短辺となる北西側と南東側の石積はいずれも 2 段で，両面とも約 0.9 m の高さを有する。石材の中には平面形が外面に対して内側が台形状に僅かにすぼまる形状を呈するものが確認でき

る。

石囲いの内部には1基の石棺を確認することができる。しかし，現在は，多くの樹木で覆われていることから，その詳細を把握することは困難である。石棺は，石囲と同様の直方体の切石を4辺に配置し，天板の石を覆いかぶせている。石棺の内部の状況は確認することができなかった。石棺については，稲村氏が「みゃーか内部には立派な石棺があったが，大戦中に日本駐留軍によって取毀され，現在は周囲の石垣だけしか残っていない。」と述べられており［稲村 1957］，現在ある石棺が当初のものかどうかは注意を要する。

(2) スムリャミャーカ

スムリャミャーカは，宮古島市下地字来間248番地に所在する。現在は，周辺がほ場整備された畑地であり，道路に面している。西側には長間浜などの海域を望むことができる。1975年2月13日に沖縄県の史跡に指定をうける。

スムリャミャーカは，琉球石灰岩を加工した板石で囲いを行い，内部に石棺を設けている。しかしながら，石囲いの部分の大部分は崩落している。全体形は，内部の状況から正方形ではなく長方形を呈することが推察される。石囲いの規格としては，東西約9 m，南北6.5 m，高さは約2.5 mを測る。石囲の石は，琉球石灰岩を使用しており，一例をあげるならば幅0.2 m，長さ0.95 m，高さ0.65 mの板石状を呈する。周辺の崩落している板石の状況から，石囲は板石を2段積んだ可能性も考えられるが，板石の幅の面から2段に積み上げると非常に不安定であり，久貝ぶさぎと同様に2

写真4　川満大殿の古墓

重の石囲いの可能性も考えられる。部分的に残されている石囲の部分では，高さが 0.6 ～ 0.7 m ほどの高さで，石の一端を直角に切り落とす隅欠きの技法も 2 か所見てとれる。また，石の高さがほぼ同じ高さでそろえられていることから，積み上げる場合は，石の目地がそろってしまい，非常に不安定な積み方になることが推察される。

石囲いの内部は，石棺の天板の板石と同じ高さまで 20 ～ 40 cm 大の未加工の琉球石灰岩が敷き詰められ，平坦面を形成している。後述するように石棺の深さは約 1.0 m はあることから，1.0 m 以上は琉球石灰岩を敷詰めていることが推察される。そして，板石の方形区画に沿うようにして 4 辺は，0.2 ～ 0.4 m 大の琉球石灰岩を 3 ～ 5 段に野面に積み上げて，高さ 0.7 m ほどの石積囲いを構成している。この石積で構成される区画の規格は，長辺が南西側で 8.7 m，北東側で 8.4 m，短辺で南東側が 5.2 m，北西側が 5.6 m を測る。この石囲の内部には，遺物が多く散乱しており，沖縄産無釉陶器の壺や甕が最も多く，沖縄産施釉陶器の灰釉碗や，福建・広東産の青花，宮古島産の壺形の土器片なども確認できる。これまでには，青磁の出土なども確認されており，スムリャミャーカの年代が 16 世紀代である一つの根拠とされているが，現在では青磁などの遺物は確認されず，報告のあった青磁の詳細についても分かっていない。

石棺部分は，前述したように琉球石灰岩が敷き詰められているためその詳細を確認することは難しい。天板の石は，長辺が 3.0 m，短辺が 2.3 m の略方形状を呈し，現在では複数に割れているが，確認できるミャーカの天板の石としては最大のものである。部分的に割れている面から，石棺の内部を確認すると，内部は 4 辺を琉球石灰岩の板石で壁面とし，板石を用いてさらに内部を 2 つに区画している。内部の計測は難しく誤差があると思うが，区画された内の北西側は幅が 0.9 m，長さ

写真5　スムリャミャーカ

が1.6～1.8 mを測り，もう一つの南東側の区画は，幅が1.4 m，長さが1.6～1.8 mで構成される。深さは，共通して約1.0 mほどである。石棺の南西面に開口部を有することから石棺というより石室と呼ぶのが適切かもしれない。

石棺の内部には非常に多くの人骨が確認でき，沖縄産施釉陶器の灰釉碗も確認できる。石棺の周辺に散乱する遺物の多くは，石棺内部からだされた資料の一部と考えられる。石棺の長辺となる軸は，南西－北東方向を向いている。

（3）大立大殿のミャーカ

大立大殿のミャーカは，宮古島市平良字下里に位置する。かつては海岸線に面していたが，現在は海岸の埋め立てと，道路拡張により，墓周辺の地形が削り取られており，現在はマティダ市民劇場前の交差点歩道に保護整備を加えた状態で残されている。

現在は，石棺部分のみが残されているが，石垣市立八重山博物館に残されている写真では，四方を長方形に切り出した板石状の石灰岩で囲み，その内部に石棺を設けている形態をみることができる。石囲の石は石を重ねておらず一段で構成されている。

写真をもとに，現在の大立大殿ミャーカを確認すると，本来は，石囲の石が石棺の側に複数寄せられている状況にある。石棺部の蓋石は，3つに割れているが，概ね本来の規格を計測することができ，縦2.2 m，横1.4 m，厚さ0.2 mの琉球石灰岩製で，長軸は北北西（330°）－南南東（150°）の方位にある。周辺の石囲の石の規格は一定ではないが，現在計測できる石の規格としては，高さ1.1 m，長さ1.6 m，厚さ0.2 mの琉球石灰岩製や，高さ0.8 m，長さ0.7 m，厚さ0.2 mの琉球石灰岩の石である。石棺部と石囲を含め，全て陸性の琉球石灰岩を利用しており，海性の石は使用されていない。現在，石棺内部には多量の土砂が堆積している状況にある。

大立大殿ミャーカは，15世紀後半に宮古島の首長を務めた大立大殿の墓とされる。祀られている大立大殿は1390年に宮古島で初めて中山朝貢をした与那覇勢頭豊見親の孫にあたり，15～16世紀にかけて宮古島を治めた仲宗根豊見親を養育した人物としても知られている。

写真6　大立大殿のミャーカ（八重山博物館収蔵）

写真7　仲屋金盛ミャーカ

（4）仲屋金盛のミャーカ

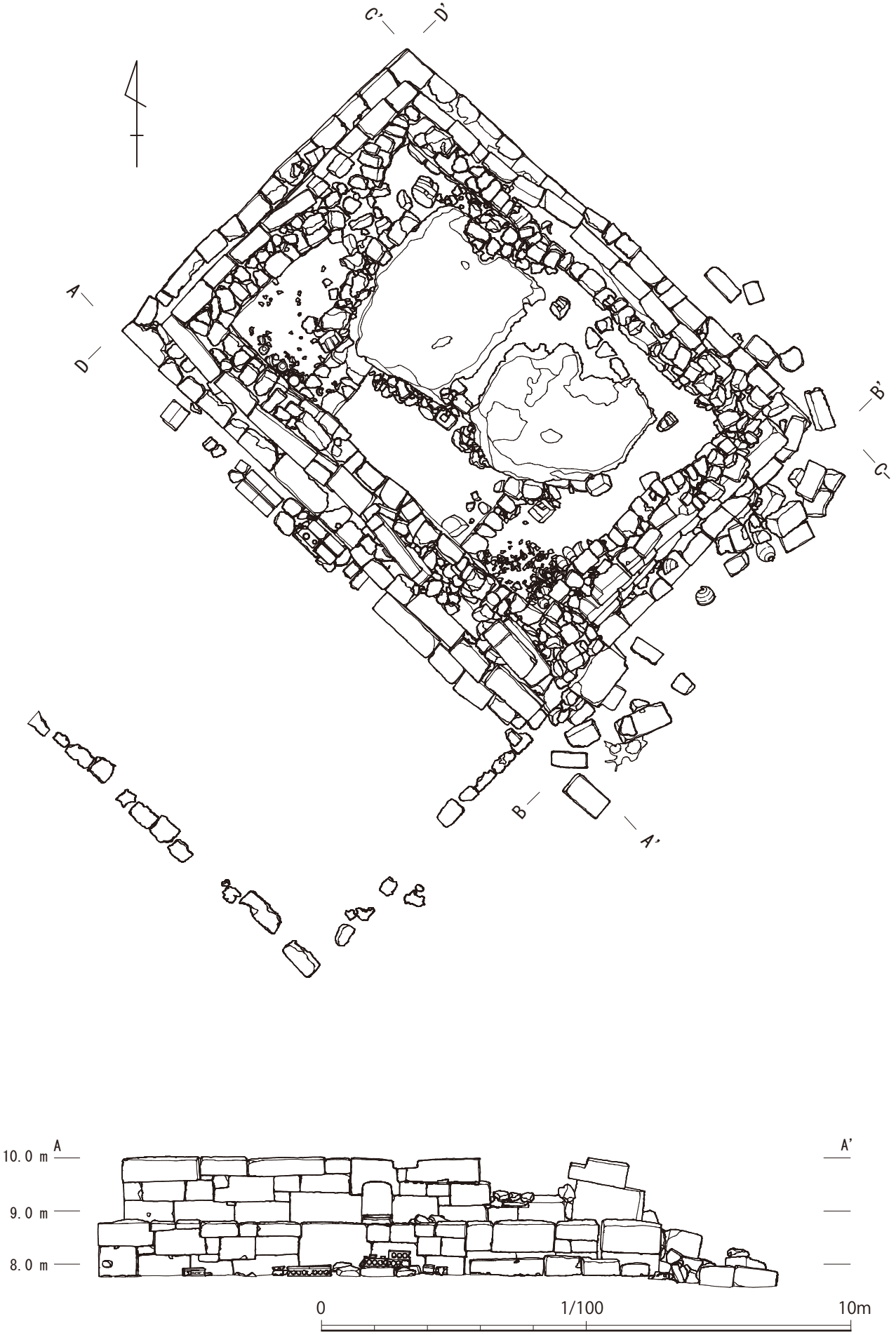
仲屋金盛のミャーカは，宮古島市平良字東仲宗根 274-1 番地に所在する。明治期の地籍図によれば，仲屋金盛のミャーカは，本来忠導氏仲宗根家，外間御嶽とも隣接する場所に位置している。しかし，現在では，仲宗根家の敷地，外間御嶽ともその規模が縮小しており，その周辺は住宅地へと変容している。2007 年 4 月 25 日に，宮古島市（旧平良市）の史跡に指定されている。

仲屋金盛は，忠導氏仲宗根家の世祖仲宗根豊見親の長男にあたる人物である。仲屋金盛は，父の仲宗根豊見親の跡を継いで宮古島の首長となるものの，部下である崎原の讒言により，野原岳において城辺字友利の有力者である金志川豊見親を殺害し，首里王府の問責にあい自害する。この事件により，宮古島においては，豊見親の称号が廃止となる。

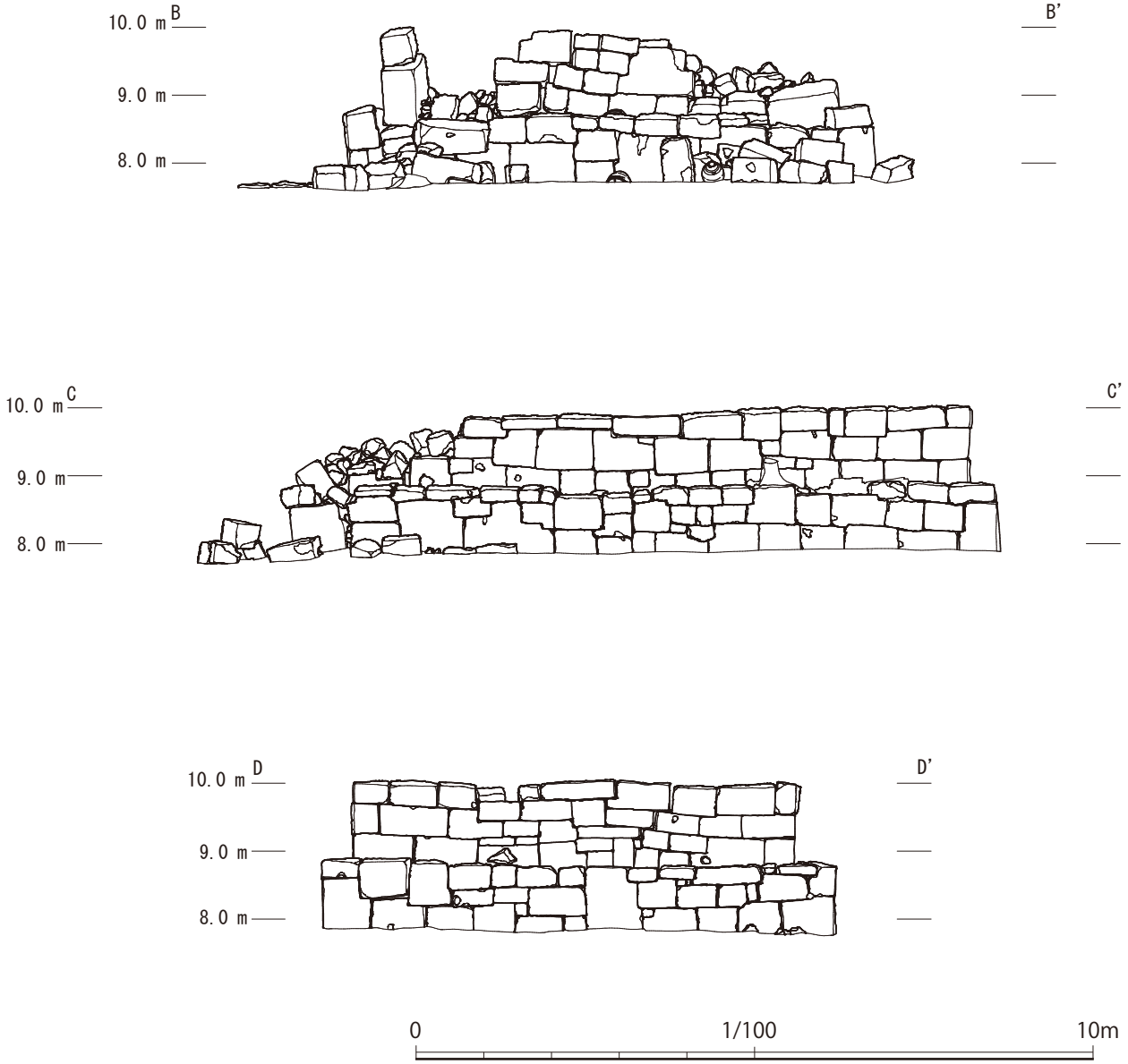
現在は，方形状に野面の石積で囲いを行い，内部にも琉球石灰岩や土砂で埋められており，石棺を確認することは困難であるが，石棺の蓋と思われる縦 2.1 m，横 1.2 m，厚さ 0.22 m の石が配置されている。周辺の野面の石積については，他のミャーカにはみられない要素であることから，本来の形態を残しているのかは明らかではないとされる。現在は，5.4 m 四方の方形の外囲いの区画が残されている。

（5）ニャーツ墓

ニャーツ墓は，宮古島市下地嘉手苅に位置する古墓である。周辺は畑地が広がっており，標高 12 m ほどの平坦地に墓が形成されている　ニャーツ墓は，2 つの石棺を 2 重に石積で囲っている。外側の石積みは 2 列構成になっている。一列目は 2 ～ 3 段に直方体状の石を積み上げ，その高さは

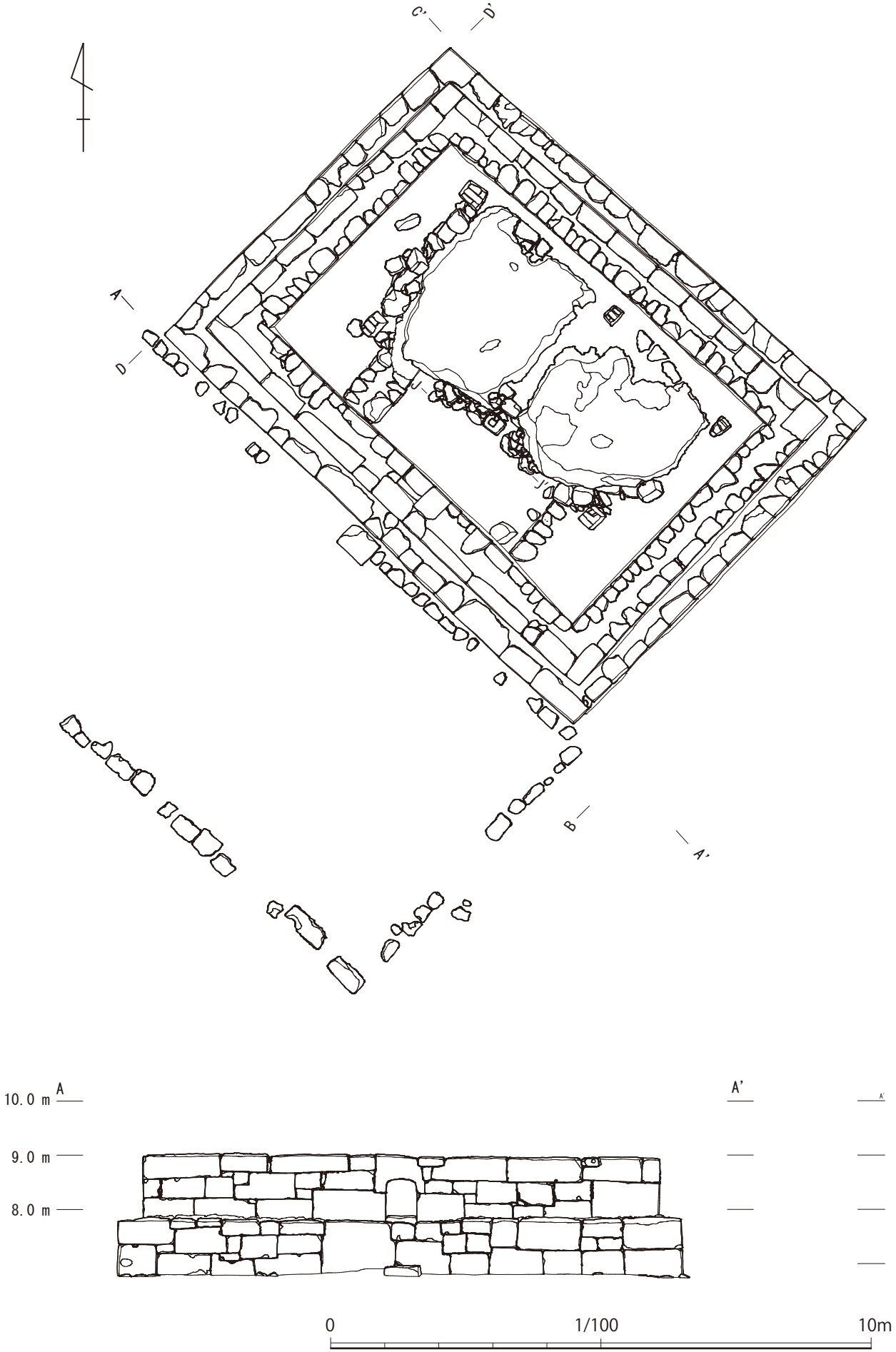


第7図　ニャーツ墓（修復前）測量図①（S=1/100）

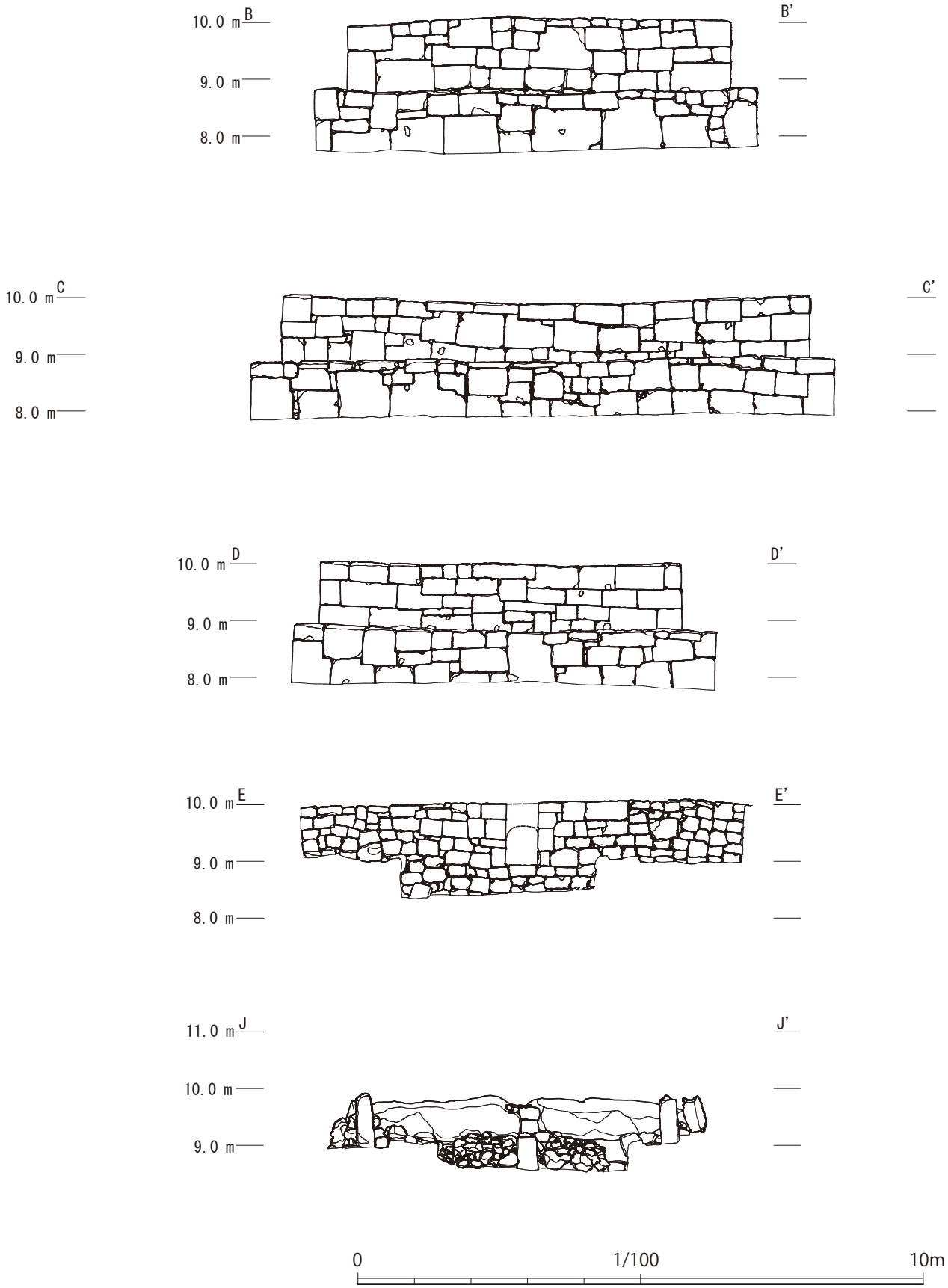


第8図　ニャーツ墓（修復前）測量図②（S=1/100）

約 1.1 m ほどである。2 列目はこの 1 列目からさらに 1.2 m ほど高くなっており，4 段ほどに直方体の石を積み上げている。この 2 列目の石積には，他のミャーカにはない，アーチ状の形態の出入口を有し，高さ 0.75 m，幅 0.6 m ほどの規格をなす。内部の石棺は，2 つあり，石棺の南西部には 1.4 × 3.4 m の空間を設けている。石棺は，石積を四方に積み上げてその上に蓋石を設けている。蓋石の平面形態は，略方形状で 2.6 × 2.9 m と，2.5 × 2.9 m の規格を呈し，厚さは 50 ～ 60 cm と非常に厚い。石囲も含めすべて琉球石灰岩で構成されている。また，2 つの石棺を並べた四隅とその辺上に，上面が 0.25 m × 0.35 m の長方形をなし，高さ約 1.0 m の柱状の石が全体で 8 つ設けられ，その上面には溝（幅 0.1 m ×深さ 0.1 m）が設けられている。柱状の石を使用するという点は，前述したスサビミャーカや，仲宗根豊見親の墓に設けられた溝とは様相を異にするが，木材をわたして屋根状の構造物を構築していたと考えられる構造は類似しているといえる。また，この石囲の墓の南西側には空間を区画するように石が一段方形にまわる。南西側の囲いは現存していないが，墓の前庭



第9図　ニャーツ墓（修復後）測量図①（S=1/100）



第10図　ミャーツ墓（修復後）測量図②（S=1/100）

部として使用される空間を囲っているものと考えられる。

ニャーツ墓は，川満大殿の墓に祀られた川満大殿の部下であった浜氏の墓とされる。当初は，石囲いの大部分が崩落していたが，2017年に史跡としての指定を見据えて修復がなされ，2018年に宮古島市の史跡に指定された。（久貝）

写真8　ミャーツ墓

第4章　考察

第1節　ミャーカに使用される石材

ここまで，宮古島市内に残る8つのミャーカについてみてきたが，これらの調査を通して，ミャーカのもついくつかの要素について考察を行っていきたい。

まず，ミャーカに使用されている石材に焦点をあてていきたい。宮古諸島は，隆起サンゴ礁からなる島々である。宮古島には北西－南東方向に3つの丘陵地形が発達するものの，比較的平坦な地形をなしている。島の北海岸一帯を中心に島尻層群も露頭するものの，島の大部分は琉球石灰岩で覆われており，島の内陸部から産出される石の種類は琉球石灰岩と島尻層に含まれる砂岩や泥岩に限られる。その他の石材としては，調査報告でもふれたように，海岸域のビーチロックがある。ビーチロックは，陸域からの淡水と海水が混ざり合う砂丘の海浜域で形成され，主に島の北海岸で発達する。

このような限られた石材の中で，ミャーカで使用されているのは，島で産出する琉球石灰岩とビーチロックである。この2つの石材に着目して，今回報告を行ったミャーカをみてみると，以下A～

Cの3つに分けられる。

A類（ビーチロック主体型）：松原ミャーカ（ウイサ南）

B類（ビーチロックと琉球石灰岩の混在型）：久貝ぶさぎ，スサビミャーカ

C類（琉球石灰岩主体型：川満大殿の古墓）：スムリャミャーカ，ミャーツ墓，大立大殿ミャーカ

なお，仲屋金盛のミャーカについては，全体の形態を確認することができないため，分類不可とする。

まず，A類とした松原ミャーカ（ウイサ南）は，石囲の北西部の数点の石を除き，ほぼその全てをビーチロックを素材としている。松原ミャーカ（ウイサ北）についても，確認できる石材はビーチロックであることから，松原に所在するミャーカの一つの特徴としてビーチロックを石材として利用するということがあげられる。

久貝ぶさぎとスサビミャーカは同じB類としたが，その石材の割合は大きく違っている。まず，久貝ぶさぎであるが，ビーチロックと琉球石灰岩の比率は，大まかにみて7:3の比率でビーチロックの利用の方が高いといえる。一方で，スサビミャーカは，石棺部分はビーチロックを使用するが，それ以外は琉球石灰岩を利用している。しかしながら，石棺部分は，ビーチロックのみを利用するという点は非常に恣意的である。また，仲屋金盛のミャーカは，その原型を確認することが難しいミャーカであるが，ミャーカ内にはビーチロック製の石材をみてとることができる。しかし，これがミャーカを構成する石材であるかを特定することは困難であることから，ここでは保留としておきたい。

C類は，琉球石灰岩のみで構成されるミャーカである。大立大殿のミャーカは，石棺部とその周辺の石囲の石が僅かに残されているのみであるが，使用されている石材は全て琉球石灰岩である。他のミャーツ墓，スムリャミャーカと比較した場合，板石状の石囲を伴う比較的シンプルな構造をなす大立大殿のミャーカであり，松原ミャーカ（ウイサ南）や久貝ぶさぎの形態に近いミャーカであるが，使用される石材には違いがみられる。

ここでは，ミャーカに使用される石材の違いに基づきA～C類の3つに分類を行った。当然ながら，使用される石材の違いは，その産出地とも大きく関わってくる。ビーチロックの産出地については，前述したように宮古島の北海岸に多くみられる。これは，淡水の湧き出る島尻層と琉球石灰岩の不整合面が北海岸の海岸丘陵部にはしっているためである。このような地理的環境は，ミャーカの点在する西部には少ない。ビーチロックを多く使用するミャーカのある久松地域においても現在確認できる場所はなく，久松の対岸にある前離がビーチロックを採りだした産出地であるとされる。前離までは干潮時に歩いて渡ることのできる環境下にあるとはいえ，島の内陸部の琉球石灰岩ではなく，離れ島のビーチロックを利用するという点に久松地域のミャーカの特徴をみることができる。その一方で，来間島においては，長間浜などの島の西岸ではビーチロックが形成されているものの，スムリャミャーカにはビーチロックが使用されていない。ビーチロックは，その形成過程において，砂丘地における石灰岩礫の堆積状況などにより，ビーチロックの性質も地域によって大きく異なる。現況として，長間浜におけるビーチロックについては，礫の含有率は低く，石材としての適性は決して低くないと考える。この点においては，同様のビーチロックが産出する地理的環境が久松と来間島とでは比較的類似するにも関わらず，スムリャミャーカにおいて石材として用い

られない点は，両地域におけるミャーカの異なる要素を示しているものと考えられる。

宮古島市内でビーチロックを石材として切り出した痕は，大浦で確認されている。石材を切り出した年代についてははっきりとわかっていないが，沖縄諸島も含め近世以降に海岸線の石材を切り出す石切り場がみられるようになる。また，今回は，大立大殿の位置する漲水港一帯を含め川満地域でのビーチロックの分布地との関わりについては考察を深めることができなかったが，今後はこのような石材を切り出す技術や，ビーチロックの分布地とその材質なども含め検討を深めていく必要性がある。（久貝）

第２節　ミャーカの年代

次に，ミャーカの年代について整理しておきたい。ミャーカの年代を発掘調査の資料から考える上で，金子エリカの報告によるウイサ南及び久貝ぶさぎから出土した中国産陶磁器は数少ない重要な資料であるといえる。出土陶磁器の写真や図面なども未掲載であるが，金子はいずれも14～15世紀代に位置づけている。その他に，ミャーカの年代を考える資料として，宮古島市総合博物館に収蔵されている稲村賢敷採集資料にミャーカ出土の遺物が残されている。遺物の袋書きには，ミャーカとしか書かれておらず，稲村の調査したいずれのミャーカかは判断できないが，黒色の釉の胴部資料が4点確認できる。いずれも胴部資料であるため，その種類や年代観についても不明であるが，今後検討されるべき資料の一つであるといえる。

島袋綾野，徳嶺理恵は，宮古・八重山諸島にみられるグスク時代から近世の墓を集成，類型化していく中で，ミャーカの埋葬形式やその構造から，ミャーカの築造年代について考察を行っている。徳嶺は，ミャーカを宮古諸島にのみみられる墓の形態であるとし，グスク時代から近世琉球にかけての年代を想定している。島袋も同様に，八重山諸島での墓の埋葬方法の変遷と比較を行いながら，ミャーカの年代を近世琉球期に位置づけている。

その他，今回報告を行ってきたミャーカについては，その被葬者に関する伝承が残る事例も複数みられる。これらの被葬者について整理するならば，久貝ぶさぎが安嘉宇立親，大立大殿のミャーカ，仲屋金盛のミャーカ，川満大殿の古墓がその例であり，松原の2基のミャーカと，スサビミャーカ，スムリャミャーカについては具体的な人物に関わる伝承などが残されていない。前者の伝承の残る事例の人物の位置づけについては第11図（人物相関図）のとおりである。1500年のオヤケアカハチの乱と仲宗根豊見親との関係性を一つの歴史的年代と捉えることができるならば，安嘉宇立親，大立大殿という人物は，15世紀代，仲屋金盛，川満大殿は16世紀代の人物と推察される。松原ミャーカについては被葬者が不明であるが，前述したミャーカの構造に基づく変遷と被葬者の年代関係については整合性がとれているといえる。しかしながら，これらの被葬者については伝承の域をでず，今後は発掘調査によってその年代をより明確にとらえていく必要がある。

第３節　宮古のグスク時代の埋葬遺構とミャーカ

14世紀から16世紀にかけての宮古島市内の埋葬遺構とミャーカの埋葬形態について比較を行ってみたい。宮古島市内のグスク時代の埋葬遺構は，比較的その検出事例が多い。外間遺跡は，現在の宮古島市役所平良庁舎の北に位置する遺跡で，宮古島を代表する士族である忠導氏仲宗根家と関

連の深い外間御嶽のあった遺跡である。外間御嶽は，歴史史料（「雍正旧記」）で仲宗根豊見親の祖先5代（第10図：人物相関図）を葬った墓域であるとされ，2007～2009年にかけて行われた発掘調査では3基の土壙墓が検出されている。土壙墓からは，『雍正旧記』に記されているような男性だけではなく，女性の埋葬人骨も確認されているものの，14～15世紀代の埋葬遺構である。外間遺跡の埋葬方法としては，いずれも土壙墓の形式をとっており，埋葬姿勢は屈葬を呈していることが分かる。詳細な年代については検討を要するが，住屋遺跡から検出されるグスク時代の埋葬遺構も成人者は土壙墓で埋葬されている。しかし，住屋遺跡における埋葬遺構の特徴としては，乳幼児の埋葬遺構は石積墓（石棺墓）を利用しており，年齢層の違いによって明らかに埋葬方法に違いがみてとれる。このような外間遺跡や住遺遺跡の考古学的視点から考えるならば，宮古諸島における14～15世紀の埋葬遺

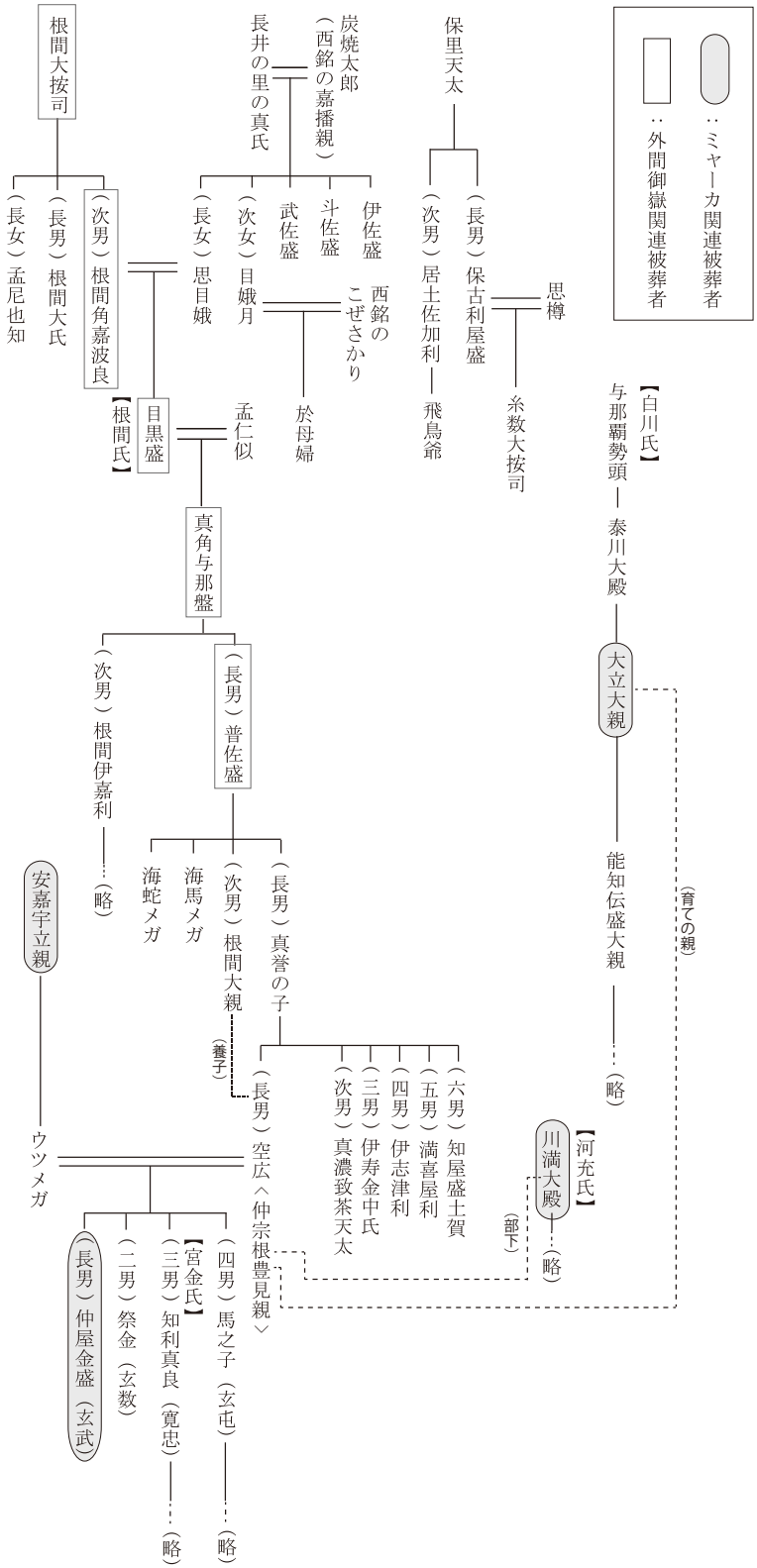
写真9　大正期の外間御嶽

写真10　外間遺跡・土壙墓2（第4号人骨）

写真11　外間遺跡・土壙墓3（第5号人骨）

写真12　住屋遺跡・第5号人骨

写真13　住屋遺跡・第1号石棺墓


：ミャーカ関連被葬者
：外間御嶽関連被葬者
【白川氏】
与那覇勢頭
泰川大殿
大立大親
（育ての親）
能知伝盛大親
（略）
【河充氏】
川満大殿
（略）
（部下）
保里天太
（長男）保古利屋盛
思樽
糸数大按司
（次男）居土佐加利
飛鳥爺
炭焼太郎
（西銘の嘉播親）
長井の里の真氏
伊佐盛
斗佐盛
武佐盛
（次女）目娥月
西銘のこぜさかり
於母婦
（長女）思目娥
根間大按司
（次男）根間角嘉波良
（長男）根間大氏
（長女）孟尼也知
【根間氏】
目黒盛
孟仁似
真角与那盤
（長男）普佐盛
（次男）根間伊嘉利
（略）
海蛇メガ
海馬メガ
（次男）根間大親
（養子）
（長男）真誉の子
（六男）知屋盛士賀
（五男）満喜屋利
（四男）伊志津利
（三男）伊寿金中氏
（次男）真濃致茶天太
（長男）空広〈仲宗根豊見親〉
安嘉宇立親
ウツメガ
（四男）馬之子（玄屯）
（略）
【宮金氏】
（三男）知利真良（寛忠）
（略）
（二男）祭金（玄数）
（長男）仲屋金盛（玄武）

第11図　人物相関図

構は土壙墓の形態をとっており，石囲を行う埋葬遺構は特異な形態であるといえる。　（久貝）

第5章　まとめにかえて

今回，宮古諸島に分布するミャーカについての調査・研究の報告を行ってきた。今回の調査成果としては，3つのミャーカでの測量図を作成することができ，今後のミャーカの調査基盤を築くことができた。そして，各ミャーカについて，その石材や被葬者，これまでの発掘調査の事例との比較検討について考察を行ってきた。ミャーカの明らかな年代については現段階で断定することはできない。しかし，近年の中国産陶磁器を中心とした研究により13世紀後半から14世紀中頃にかけて，沖縄諸島とは異なる南からの交易路の利用が明らかにされ，元代においては東アジア海域において活発な交易活動があったとされている。宮古諸島においては，久貝が高腰タイプと位置付けた遺跡群も同時期に盛行期があり，13世紀後半のこのような交易活動の活発化が，宮古諸島内で遺跡が急増する要因の一つであると推測される［久貝2018］。しかし，現段階でこの時期の交易活動に伴う他地域からの文化の影響とミャーカを結びつけることはできない。また，島袋綾野氏が指摘するように，グスクだけではない近世以降の墓形態とも比較検討を行う必要性がある。

最後になるが，稲村賢敷が1958年に松原ミャーカの発掘調査を行い，1965年に金子エリカが松原ミャーカ，久貝ぶさぎで発掘調査を行い，ミャーカに関する研究が始まった。その後，1974年に久松ミャーカ（巨石墓群）〔市史跡〕，1970年にスムリャミャーカ〔県史跡〕，1976年に川満大殿古墓〔市史跡〕，1978年にスサビミャーカ〔市史跡〕，2007年に仲屋金盛ミャーカ〔市史跡〕，2014年に大立大殿ミャーカ〔市史跡〕，2018年にミャーツ墓〔市史跡〕が指定されるなど現存するミャーカの大部分が文化財指定を受け保存されてきた。また，グスク時代から近世にかけての古墓を総論した中で，ミャーカの構造や年代が位置づけられてきた。その一方で，ミャーカにフォーカスした調査・研究はほぼ皆無であったといえる。

今回のミャーカに関する調査・研究では，まず現存するミャーカの測量図の作成を中心に作業を行った。言い換えるならば，ミャーカの大部分は測量図の作成もまだなされていないような状況にあり，今回の調査はミャーカ研究に対する新たな第一歩を踏み出したといえる。そして，これらの作業を通して，新たな課題も明確になってきた。具体的には，ビーチロックの利用におけるその分布状況と切り出し技術をもった集団の出現の歴史的背景，また過去の宮古島市総合博物館収蔵の稲村賢敷資料の再調査などがあげられる。ミャーカについては，これまでその分布が宮古諸島にのみ確認されていることから，その源流に関しての議論が主だった。今後，この大きなテーマに迫っていくためにも，今回踏み出した新たな調査の一歩を継続して進めていく必要性がある。　（久貝）

註

（1）――2008年8月10日の宮古毎日新聞の中で，ナーザクミャーカについて次のように記されている。5.8 m × 8.6 m 角の大きさで，高さが2 m 弱。最大1 m 角の大きさの切り石を組んだ見事なミャーカ。八つの部屋があり，一族か，家族かはわからないが，集合墓と見られる。副葬品の焼き物は十七世紀後半のものが主体であるが，大正期の物まで混在している。

（2）――稲村は，「みゃー」は墓の内部に限らず総て石垣をもって囲われたものとして，庭も「みゃー」，屋敷も「みゃー」と称するとしている。

（3）――宮古島旧記は，『御嶽由来記』，『雍正旧記』，『宮古島記事』，『宮古島記事仕次』の総称である。
（4）――あーすみゃーかは，来間島部落の南方一町程離れたところにあり，周囲の石垣が道路修繕のために取られ，石室のみが残されていると稲村は報告する。また，あぱなきみゃーかは新里の東方三町ばかり離れた海岸段丘にあり，南北約七間，東西約三間半，石垣の高さは六尺と稲村は報告する。しかし，この2つのミャーカについては，現在その所在については不明であり，確認することができなかった。

引用・参考文献

稲村賢敷 1957『宮古島庶民史』
稲村賢敷 1962『宮古島旧記並史歌集解』
金子エリカ 1967「宮古島の巨石墓について―宮古島久松の二巨石墓復元調査報告―」『沖縄文化』23
金子えりか 1993「第三節　巨石遺跡―先島の例」『海洋文化論』比嘉政夫編
久貝弥嗣 2018「第Ⅳ部総括」『伝説の争乱・与那覇原軍―13世紀から15世紀にかけての防御的遺跡の消長―』おきなわ銀行ふるさと振興基金助成研究
島袋綾野 2003「石垣島を中心とした墓の事例紹介―八重山における墓の変遷試案―」『南島考古』第22号
島袋綾野 2006「宮古・八重山諸島の古墓」『考古学ジャーナル』NO.552
徳嶺里江 2006「考古学からみた先島諸島の墓について」『廣友会誌』第2号

久貝弥嗣（宮古島市教育委員会主任主事）
栗木 崇（熱海市教育委員会学芸員）

（2020年7月9日受付，2020年10月16日審査終了）